

目 次

古代*『ローマの休日』	藤野 奈津子 (1)
インドの話	原 幸一 (5)
新規受入図書案内(2006年4月～2006年9月受入分)	(9)

古代* 『ローマの休日』

法経科助教授 藤野 奈津子

はじめに

オードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペックの映画、『ローマの休日』については、ほとんどの皆さんがご存知でしょう。ストーリー（ヨーロッパの或る小国の王女アンは、欧州各国を巡る親善旅行のなかでイタリア・ローマを訪れます。しかし、連日の公務に嫌気がさした彼女は宿舎となっている宮殿を抜け出し、新聞記者ジョーと出会い…というお話です *監督ウィリアム・ワイラー）も、そしてオードリーも素晴らしく魅力的ですが、実は舞台となったローマ市の観光映画としても非常に楽しめます。ローマは古代より多くの作家や芸術家の興味と関心を集めてきました。ローマを舞台にした小説や映画も、ですから、たくさん作られています。ここでは、そうしたものに触れながら、古代ローマとその世界について少しご紹介してみたいと考えています。

1 真実の口

まずは、映画『ローマの休日』でも最も有名なシーンのひとつ、真実の口のところから話を始めてみましょう。“真実の口”のある教会としてよく知られるようになっていますが、ここは正式名をサンタ・マリア・イン・コスメディン教会といいます。場所は、ローマ市中心部からさほど遠くありません。あとで出てくるコロッセオやチルコ・マッシモからも程近いところです。さて、この“真実の口”、実際には古代ローマの下水道マンホールの蓋であったものです。それが、発見されて、いつしか“真実の口”として有名になりました。“真実の口”とは、映画でも出てきますが、その大理石でできた蓋に刻まれている河の精の口に手を入れると、ウソツキが手をかまれるという伝説に由来しています（グレゴリー・ペックがスーツの袖にうまく手を隠して、かまれたようなウソをつきます）。

ここで、マンホールの蓋というのは、ちょっと意外かもしれませんが、古代ローマの都市はどこでも上・下水道が完備された、近代的な都市構造を誇っていました。上水に関していえば、ロー

マはまた、巨大な水道橋の建設でも知られています。ローマ人は建築の天才といわれるくらいで、巨大な水道橋をヨーロッパの各地に残しています。有名などころでは、南フランスのポン・デュ・ガールがあげられるでしょうか。古代ローマの上流階層の家庭には、今の私たちの生活と変わらないような、直接自宅までの水道が引かれていました。ポンペイの遺跡には、そうした屋敷跡がいくつもあって、各家までは銅製の細い水道管を通して水がやってきました。こうした水は、水源のある山から遠く、都市まで引いてくるわけですから、橋にも微妙な傾斜がつけられ、家々まで行き渡るような巧みな圧力計算がなされていたといわれています。

ところで、このポンペイという都市があったのは、ローマの南、現在のナポリの近くです。当時から、商業都市として、また風光明媚なリゾート都市としても知られていました。そのポンペイを一夜にして廃墟にしたのが、有名なベスビオ火山の大噴火です。ポンペイはその火山灰によって覆いつくされ、発掘作業は現在も続けられています。ベスビオ山は、そうしたわけで、今では禿山になっていますが、ポンペイが華やかだった往時には、全山が葡萄の木に覆われた緑の山であったといわれます。イタリアはワインでもとても有名ですが、当時のこのあたりは名酒の産地として知られていました。今も、ナポリの「キリストの涙（ラクリマ・クリスティ）」というワインは有名でしょう。

話をもどして、下水道の整備にもローマ人は非常な情熱を傾けました。彼らのいうモダンな生活には欠かせないインフラだったからです。公衆トイレすらも、当時から水洗でした。そうして、実際、こうした古代の人々が作った下水道の設備をローマ市は現在もなお使い続けています。それほどによくできた施設だったというわけです。

2 コロッセオとフォロ・ロマーノ

さて、次では、誰でも知っているローマの観光スポット、コロッセオとフォロ・ロマーノについて少し説明してみましよう。映画『ローマの休日』では、王女がスクーターで走り抜けるシーンや、ペック演じる新聞記者との出会いのシーンのバックでも登場してきます。

コロッセオとは、ラテン語のコロセウム（転じて、英語のコロシウムになります）から来ており、円形の闘技場を指します。これも古代ローマの都市には欠くことのできない施設で、イタリア各地のみならず、北アフリカやイベリア半島など、ローマの支配下にあった地域には多くの遺跡が残されています。特にローマ市のコロッセオについては、よくガイドブックなどで私たちが目にしていますが、そこで実際に見ている（覗いている？）のは、施設の地下部分にあたる場所です。当時は、この上に板が敷かれていました（流血を掃除しやすくするために、砂も撒かれていたといわれます）。この地下には、闘いに使用される猛獣や剣闘士たちが待機していて、彼らはエレベータのようなものに乗せられ、観客の待つ闘技場へと登場してくる仕掛けになっていました。これが、いわゆるローマにおける「パンとサーカス」の「サーカス（見世物）」だったわけです。猛獣は、アフリカの内陸などから集められていましたが、ますます珍しくて獰猛なものが求められるようになってゆきました（小プリニウスは、そのような退廃的な現状を嘆いています）。また剣闘士も、当初は戦争によって捕虜となった者たちでしたが、後には専門の剣闘士訓練所のようなものが作られ、キリスト教徒がそうした戦いの相手とされることもありました。

ちなみに、「パン」とは、貧しい者たちへの配給のことで、この配給場所が、さきほどの“真実の口”教会近くにあった、ウェスタ神殿（ヘラクレスとウィクトル神殿）にありました。ウェスタとは、かまどのことで、その火を永遠に守ることが国家の繁栄につながると当時の人々は考

えており、ウェスタの巫女と呼ばれる未婚の女性はその役割を努めました。ローマの神々は、ほとんどがギリシアからの輸入でしたが、そうした神々を奉る神官団に、ユーピテル（英＝ジュピター）の最高神官もありました。これをポンティフェクス・マクシムスといましたが、現在、この名称は、ローマ教皇を表すものとして公式に使われています。

先ごろ、長く教皇を務めたヨハネ・パウロ2世が亡くなり、新しくドイツ出身のベネディクト16世が就任して話題となりましたが、最初のローマ教皇となったのが聖ペテロです（伊＝サン・ピエトロ 英＝セント・ピーター）。ペテロとは、キリストの12使徒のうちの一ですが、名前の意味するところは“岩”だとされます（教会の礎となるように、ということだとか）。さて、そのペテロですが、先ほどコロッセオのところで言ったように、当初ローマ帝国はキリスト教を迫害しており、そして、そのあまりの激しさに、ペテロですら一度ローマから立ち去ろうとしたことがありました。ところが、その逃げ帰る途中で、彼は師であるキリストに出会うことになります。現在、その場所に建つとされるのがクオ・ヴァディス教会です。これも、正式名はサンタ・マリア・イン・パルミス教会といますが、一般には、“クオ・ヴァディス”教会としてのほうが有名でしょう。“クオ・ヴァディス”とは、こうして、キリストに出会ったペテロが驚いて問う言葉、「主よ、いずこへ行かれるのですか（ドミネ クオ ヴァディス）？」というラテン語に由来します。すなわち、キリストが、自らもう一度十字架にかかりにローマへ行くというもので、これを聞いたペテロは恥じてローマへ舞い戻り、そこで逆十字かかったとされるのです。その処刑の場に建つのが、現在のヴァチカンの建物で、ペテロはこうして最初のローマ教皇となり、同時に天国の門の門番ともなったようです（ペテロの像は、そのため鍵をもっています）。さらに、この“クオ・ヴァディス”、ポーランドの作家シェンキェビッチの小説のタイトルともなっており有名です。

このシェンキェビッチの小説もまた、何度か映画になっていますが、古代ローマを扱った映画のなかで、おそらくもっともよく知られているのは、チャールトン・ヘストン主演で作られた『ベン・ハー』ではないでしょうか（『ローマの休日』と同じ、ワイラー監督作品です）。古い映画なので、皆さんあまり観ていないかもしれませんが、時代考証まで含め非常によくできた古典的スペクタクル映画といった感です（イタリアというイメージがありますが、古代のローマにトマトはありません。南米原産で大航海時代以降にヨーロッパに入ったわけですから、そのトマトを小道具係が置いてひどくしかられたというエピソードがあるというくらいです）。この映画『ベン・ハー』のほうはまた、クライマックスの戦車競争シーンで特に有名ですが、撮影にも使われたのがチルコ・マッシモ、すなわち大競技場です。地理的には、コロッセオや先に話した“真実の口”教会からも近いですが、古代には、この場所がローマ軍団の集結の地となっていて（そこで軍神“マルスの野”と呼ばれました）、ここから彼らは各地へ進軍していったのです。「ローマは3度世界を征服した」といわれるときの、最初の軍事的成功とは、この強力なローマ軍団によってなされたものでした。

さて、もう一方のフォロ・ロマーノのほうですが、これは“フォーラム”すなわち、古代ローマ市の政治と経済の中心であった場所を指します。映画で、鎮静剤を打たれた王女が寝入ってしまうベンチの背後にあるのが現在のフォロの姿になりますが、古代にあつては、ここには多くの神殿や重要な建物が集中して建てられていました。ローマの共和政の要であった元老院もここに置かれていたと推測されています。裁判や、商業取引などもここを中心に行われ、まさにローマ市の中枢としての機能を果たしていたわけです。また、諸外国との戦争に勝った将軍たちが凱旋

式をしたのもこの場で、彼らは出陣に際して戦勝を祈った神にその勝利を報告するため、凱旋門を通過して2頭立ての戦闘馬車で奥の神殿まで凱旋パレードを行い、戦利品を市民にも振舞うものとされました。映画『クレオパトラ』では、ローマの初代皇帝となるアウグストゥスが、その勝利とローマの力、さらには自らの力を誇示するため、クレオパトラを虜にして、戦利品としてエジプトから彼女を連れ帰っているのが印象的です。

3 サンタンジェロ城

最後に、『ローマの休日』、映画の後半の名場面、王女が誘われて船上パーティーへ出かけるシーンに関連したところから、テヴェレ河の周辺についてお話してみましよう。それらのシーンのバックとしても登場するのが、ライトアップされて浮かび上がるカステロ・サンテンジェロです。大天使ミカエルが頂上に輝く「城」のイメージで、ヴァチカンの教皇庁とは連絡通路で結ばれているなど、キリスト教会の施設といった感ですが、もともとは、古代ローマの皇帝ハドリアヌスの墳墓として建設されました。2000年近く前には、全面に大理石が張られ、5賢帝のひとりハドリアヌスの墓としてふさわしい、まさに壮麗・豪華な建造物であったと推測されています。そのうちに、キリスト教の施設となってからも、城砦や、さらに牢獄として使われるなど、さまざまな紆余曲折を経てはいますが、今なおローマを代表する大建造物だといえるでしょう。

映画では、この船上パーティーが王女の護衛を巻き込んで大騒ぎとなり、アンとジョー・ブラドレーは河に飛び込みますが、その後、王女は抜け出した宮殿へと戻ってゆくこととなります…。

おわりに

映画『ローマの休日』には、観た人それぞれに想いの深いシーンがあるかと思います（スペイン階段のジェラートや、トレビの泉近くで髪を切る場面なども）。ですが、ラストの宮殿での記者会見の場で、王女の答える言葉は素敵です。“It would be difficult to…., Rome! By all means, Rome. I will cherish my visit here in memory, as long as I live”、「ローマ…」とここで繰り返されるのを聞くと、スタンダールやゲーテはいうに及ばず、いまだに多くの人々の興味や関心を引きつけてやまないローマという都市と、その歴史の魅力をあらためて痛感します。

そして、古代ローマの人々の社会や、とりわけその社会を照らした法がどのようなものであったのか、それらについて少しずつでも自分の力で解明してゆくことができれば幸せだと思うのです。

インドの話

生活科学科助教授 原 幸一

数年前、インドへ2週間ほど旅行をした。以前からインドには行きたいと思ってはいたものの洪水やペストの流行でなかなかチャンスが無かったため行きそびれていた。当時の職場にアメリカから日本に帰ってきたHさんという同年代の研究者がおり、彼がインドファンで以前に何度か旅行をしていた。次に行くときに一緒に行こうということで行くこととなった。その時の話の一部をとりとめなく紹介することとする。

インドではコレラや赤痢、破傷風などの病気は普通にあるようで、それらの予防接種を受けていないと現地で困ったことになる可能性がある。仕方なくいくつかの高価な予防接種を受けて行くこととなった。しかし、コレラの予防接種は効果のほどが解らないレベルであり、受けたのはよいものの腕が倍くらいに腫れたままインドへ行くこととなった。

行程は、まず、デリーに到着し、その後はアグラ、バラナシ（ベナレス）、ガヤ、コルカタ（カルカッタ）と南下する予定であった。

名古屋から発ち、インドへの到着は夜であった。空から見たインドは地上に星のように赤い光の島が点在している不思議な光景であった。日本の都市は様々な光があるが、ほとんど単色に近く、都市と都市をむすぶルートが光っていないため光のかたまりの点在に見えるのである。

その中の一つに降り立ち、まずは荷物が手元に届くまでの時間をどれほど待ったか、多分1時間以上であったと思われる。さすがにインドはインド時間である。ようやく荷物を手に入れ、お金を換金して外に出ると空港と外の境界のフェンスに客を待つタクシーやオートリキシャというバイクの人力車みたいなものの運転手が壁のように群がってこちらを見て手を振っている。それもうるさい。かなり不気味であった。人の顔だけがフェンスの向こうで薄暗い光に浮き上がって何重にも重なっている。これがインドの第一印象である。そして、臭いがきつい。排気ガスと牛糞と生活排水と全ての汚い臭いが混じり合った何とも云えない臭いである。神秘の国である。

一日目のホテルはあらかじめ予約して宿泊し、その後は最後のカルカッタまでは予約なしに適当に泊まるという予定であった。しかし、皆さんは絶対にマネをしなくて頂きたい。男ふたりでもかなり危ない旅行であったということは後で解ったことである。二日目以降のホテルは一泊150円から300円くらいのホテルを利用したが、ほぼ全てのホテルにはmissing person、つまり行方不明になった世界中の人々の写真がロビーに貼られていた。もちろん日本人もいるが、欧米の頑強そうな男性の写真も貼ってある。ひとり旅でインドに入ったものの何かのトラブルに巻き込まれて、多分生きてはいない人たちである。実際に同時期にひとりでインドに行った九州の男子大学生が行方不明になり、結局は到着したときに乗ったタクシーの運転手とその仲間に切り刻まれて袋詰めされて川岸で発見されたという事件が起きている。女性の安宿ひとり旅など全く勧められない。

インドでは気を抜いてはいけない。安宿での過ごし方は、荷物には全て鍵をかけ、現金は手離さない。部屋に入ったら、内側から自分たちが持ってきた大きく丈夫な南京錠を掛ける。自分たちを牢屋に閉じこめるようで変であるが、そうしない限りホテルといえども自分たちの安全は守れないようである。

危ない話はこの辺にして、話を進める。ご存じと思うが、ヒンドゥー教徒の多いインドでは牛が聖なる動物であり、どこにでもいる。本当にどこにでもいる。そして、何もしていない。トイ

レから駅の改札にもいる。ひどいときは狭い路地に入ると向こうから牛が歩いてくる。そうなる
と戻って道を譲る以外はない。本には書いてあったが誇張のない本当の事であった。

インドではやはりいろんな不思議なことがある。初めにデリーで体験したインドの神秘は、い
つの間にか靴に牛糞がついていることである。踏まないように気をつけて避けて歩いていても、
すきを見せるとついている。横断歩道を渡っている間にもなぜかついている。かなりの神秘であ
る。困った顔をしていると靴磨きの少年がタイミング良く近づいてくる。良い商売である。つい
ている牛糞は適度な量の適度な柔らかさのモノである。しかし、つけられた瞬間は結局解らなかつ
た。職人技である。

ニューデリーではその不思議を体験しながら観光地を廻った。一部はHさんの知り合いの車に
同乗させてもらい廻ったりしたが、自分たちで廻るときはオートリキシャの運転手との交渉にな
る。たくさん運転手がいるときはこちらが値段を設定して競らせるのである。運転手は初めに何
十倍という料金をふっかけてくるのでせめて数倍まで下げさせる。ひどいときはケンカになりそ
うになる。足を使うだけでも大変である。

デリーではインド門、ガンディー廟、クトゥブ・ミナール、シーク教徒の寺院などを、アグラ
ではタージマハルに数回入った。ベナレスではお釈迦様が初めて説法をしたというサルナート、
ダサシュワメート・ガート、ブッダガヤでは仏陀が悟りをひらいたという菩提樹のあった場所
などを廻った。

その時の旅行には同じ職場の女性がひとり同行を希望していたが、仕事の都合で行けなくなり、
その代わりに子どもの頃に遊んでいたリカちゃん人形を手渡されて身代わりに同行することとなっ
た。ということで観光地では我々の写真とリカちゃん人形の写真を撮るという仕事があった。と
あるモスクに入り、写真を撮ろうと人形を立てていたら、アメリカ人の女性が手伝ってくれてい
たのは良かったのであるが、警備員が銃を持ってやってきて中止させられてしまった。よく考え
ればイスラムの聖域で東洋人の男ふたりとアメリカ人の女性が人形の記念撮影をしている姿は信
者から見ると失礼なことであろう。このリカちゃん人形の記念撮影にはその後はそれほど問題
を起こさなかった。タージマハルに入るときに持ち物検査を受けた時に警備の人には笑われたくら
いである。

観光地ではイメージ通りのコブラ使いがその辺におり、商売をしている。あとは物乞いの子
ども達である。「バクシーシ、バクシーシ」といって追っかけてくる。「お恵みを」という感
じである。インドにはカーストという階級社会がある。前世の行いにより、それぞれの階級に
生まれ変わるようになっていく。周知のことなので詳しいことは書かないが、一番下の階級
外が不可触賤民である。彼らの子どもは施されて生きてゆく。仕事は物乞いになってしまう。
町中には多くの不可触賤民の人々が道路で生活している。行く先々でインドの行政や福祉、
医療はどうなっているのかという疑問が出てくるが現状を見れば、社会構造と文化、宗教の
複雑さ、経済的な状況の偏りと誰も何もできないことがよく分かる。そして、何でも有り
の世界である。

日本には本当に一部の金持ちの人々の生活や学習習慣が「インド式」などともてはやされて
いるが、インドの現実とは全く違うことを知って頂きたい。日本の高校の地理の授業では
インドの公用語は英語などと教わったかもしれないが、真っ赤な嘘である。確かにイ
ギリス統治下では英語を多くの人が使っていたかもしれない。しかし、英語を話す
ことができるのは十億の人口の数パーセントもしくは0. 数パーセントの特権階級
の人々と外国人相手の商売をする人たちである。町の中で商売をする人は英語や
日本語を片言で話すのが日常的に使うことができる人などほとんどい

ない。多くはヒンドゥー語をはじめとするその他地方のことばである。路地に入っていけばほとんど言葉は通じない。何かあるときは日本語でまくしたてたほうが気持ちとして通じるくらいである。

インドで困ったことは水である。生水は禁物である。日本から飲み水は持っていったがいつまでもあるわけではない。飲み物は手の加えてある水分が安心である。コーラやファンタはよい。ミネラル・ウォーターでも観光地で買ったものの中に砂が沈殿していることもあった。そういった場合は封がしてあるように見えてもそのまま捨てるしかない。多分、中身はその辺の井戸水で、日本人には耐性のない細菌・ウィルスがたくさん詰まっている。ブッダガヤというお釈迦様が悟りをひらいた町で持っていったカップヌードルを食べようと思い、熱湯をレストランで注文した。すると、持ってきたものがぬるい湯で、それもガラスコップに入っていて下部の下1/3くらいに沈殿物が貯まっていた。煮沸した証拠がないので厨房まで侵入し、しっかりとミネラルウォーターを目の前で煮沸してもらい、それでやっと食べることができた。しかし、誰も見ていないとホントに適切な事をする。最近日本人も同じのような気もするが・・・。

食べ物に気をつけていても体調は崩れる。下痢と発熱である。よく考えればマラリヤもペストも身近な世界である。ホテルのベッドにはネズミの糞が散らばっていたり、トイレには馬鹿でかいヤモリがいたりする。聖地ベナレスではふたりともなぜか熱を出して、一日寝込んでいたこともあった。その夜、寝ていると遠くからかなり大きな騒ぎの音が少しずつ近づいてくる。窓から見ると結婚式である。時間は夜中の12時過ぎ。電飾に囲まれた馬車に乗って花婿、花嫁が少しずつ進んできてガンジス川で儀式を行っているようである。夜中にど派手な行進をやっても結婚式なのでしかたがない。2時間以上の騒ぎで体調が悪くても睡眠もままならない状態であったが、仕方がない。しかし、これもインドの不思議である。幸い、病気はふたりとも悪化しなかった。

皆さんがテレビなどでよく目にするインドの風景の一つは、多分、ベナレスにあるガンジス川のガートである。ガートとは沐浴をする川沿いの場所でも何キロか続いている。祈りを捧げる場所であると同時に、人が死ぬとこのガートで荼毘にふされる。これはヒンドゥー教徒にとってはこの上ない事とのことである。煙の上がっているところへ行くとそこでは儀式が行われている。亡骸が焼かれるのを見ていると、本当にきれいに灰になっていく。結婚式と同様に派手な行進と共に亡骸が運ばれてきて木の上に置かれて火がつけられる。2時間くらいで全てが灰になる。灰はそのままガンジス川に捨てられる。お金のない人たちは焼かれぬまま流されるようである。何人かは運ばれてきてそのまま流されていった。

紙面が足りないので、あまり多くの事を書けないが2、3話を付け加えると、一つはカレーの話。インドのカレーは本当に辛い。辛さの調節など無い。ただ辛い。サモサも辛い。一つ食べるためにコーラが一本必要である。もう一つは障害者の話。電車が停車するとポリオで下半身不随の人が靴底の張り替えの仕事をしに入ってくる。お寺の前では身体障害のある人が物乞いをしている。ガヤにいたときは少年が自分の足を指さして「ポリオ、ポリオ」といってお金を要求してくる。多分、淘汰が働いているのであろう。ある一定以上の障害者以外は生きてゆけないかもしれない。インドは急速に発展しているというが、福祉が整うことはいつになるのか。

発展しているインドが今後どうなっていくのかは興味がある。ここに書いたことは本当に一部であり、いろんな事があるのがインドである。公務員である鉄道職員が状況につけ込み不正に料金を支払わせたので、返すように怒鳴って抗議をすると「I am happy. You are happy」といってニタニタ笑っていたりする。

感想としてはシビアな現実ばかりであり、インドの本物の神秘にはアクセスできず残念であった。また、インドには行ってみたい。時間ができればの話である。ただ、体力が必要である。お金にものをいわせて大名旅行をする手もあるが、それはかなり面白くなさそうである。

最後にインドに関する本をいくつか紹介しておく。なお、本を読んで面白そうと思っても安易に行こうと考えないように。

「ガンジス河でバタフライ」 たかの てるこ 幻冬舎

「河童が覗いたインド」 妹尾 河童 新潮社

「深夜特急〈3〉インド・ネパール」 沢木 耕太郎 新潮社

「印度放浪」 藤原 新也 朝日新聞

「インド怪人紀行」 ゲッツ 板谷 角川書店

◆◆ 新規受入図書案内 ◆◆

(2006. 4~2006. 9)

総記(000)

生協の白石さん

白石 昌則, 東京農工大学の学生の皆さん
国立国会図書館入門 ND L 入門編集委員会編

<岩波新書>

医療の値段 — 診療報酬と政治 結城 康博
邪馬台国論争 佐伯 有清
良心の自由と子どもたち 西原 博史
世界森林報告 山田 勇
いま平和とは — 一人権と人道をめぐる9話

季語集

社会学入門 — 人間と社会の未来 坪内 稔典
世界の音を訪ねる — 音の錬金術師の旅日記 見田 宗介
笑う大英帝国 — 文化としてのユーモア 久保田 麻琴

小説の読み書き

日中関係 — 戦後から新時代へ 富山 太佳夫
アメリカの宇宙戦略 佐藤 正午
魔法ファンタジーの世界 毛里 和子
戦争で死ぬ、ということ 明石 和康
水の道具誌 脇 明子
島本 慈子
山口 昌伴

<岩波ブックレット>

こう変わる! 介護保険 小竹 雅子
「心の病」をくぐりぬけて 森 実恵
憲法九条はなぜ制定されたか 古関 彰一
戦争って、環境問題と関係ないと思った 田中 優
安全な空気を取り戻すために

菱田 一雄, 嵯峨井 勝
保育園と幼稚園がいっしょになるとき 近藤 幹生
新型インフルエンザ・クライシス 外岡 立人
「ゲド戦記」の世界 清水 真砂子

哲学(100)

記憶の心理学と現代社会 太田 信夫
心理学が描くリスクの世界 — 行動的意思決定入門
広田 すみれ, 増田 真也, 坂上 貴之
心理学の切り口 — 身近な疑問をどう読み解くか 森正 義彦
現代の人間学 (序説) — 哲学・社会学的探究 南條 文雄
行動変容法入門 レイモンド・G. ミルテンバーガー
老人・障害者の心理 中野 善達, 守屋 國光

歴史(200)

エピソードで語る日本文化史 松井 秀明
三重県史 — 資料編 考古1 三重県
信長公記 (上・下) 太田 牛一
近世領主権力と農民 伊藤 忠士
九州一周浪漫ウォーク 井上 如
涙を朝陽に還す時 緒野 真優
あの戦争は何だったのか — 大人のための歴史教科書 保阪 正康
維新史料聚芳 維新史料編纂事務局

社会科学(300)

株式投資「必勝ゼミ」 — 現役大学教授がこっそり教える 榊原 正幸
衣料事情あれこれ — 装いの今
三重短期大学公開講座運営委員会
やさしい倒産法 宗田 親彦
訴訟当事者からみた民事訴訟 波多野 雅子
ILO とジェンダー — 性差別のない社会へ
戸塚 悦朗
出た data 問日本史・世界史・地理 アカデミー編
出た data 問国語・文学・芸術 アカデミー編
出た data 問数学・理科 アカデミー編
出た data 問文章理解 アカデミー編
出た data 問数的推理・資料解釈 アカデミー編
出た data 問判断推理・空間把握 アカデミー編
出た data 問政治・経済・社会 東京アカデミー編
経済時系列分析 広松 毅, 浪花 貞夫, 高岡 慎
仕事論 — 先輩に聞く、女性と就職 ドーンセンター編
若者の心理と文化 アーロン・H・エスマン

母性の喪失と再生—事例にみる「母」としての愛と葛藤
東山 弘子

赤ちゃんはどこまで人間なのか—心の理解の起源
ポール・ブルーム

まなざしの誕生—赤ちゃん学革命 下條 信輔
教師をめざす人のための青年心理学 伊藤 直樹

授業を支える心理学 スーザン・ベンサム
教師誕生—新任教員と指導教官の記録 鈴木 義昭

授業のための世界地理 地理教育研究会
再発掘・心を揺さぶる地理教材 濫澤 文隆

成長条件が復元し、新たな成長を目指す日本経済
内閣府

「時代の節目」に立つ中小企業 中小企業庁
住基ネットの「真実」を暴く 斎藤 貴男

近世の日本 藤井 英之, 宮崎 正康
近代の日本 藤井 英之, 宮崎 正康

嘘とだましの心理学—戦略的なだましからあたたかい嘘まで
箱田 裕司, 仁平 義明

児童虐待：現場からの提言 川崎 二三彦
「みんなの意見」は案外正しい

ジェームズ・スロウィツキー
ボローニャの大実験—都市を創る市民力

星野 まりこ
大学で何をどう学ぶか 飯田 史彦

刑法・民主主義と法 広渡 清吾
就活—大学生のためのリアル就活本

日経ナビ&就職ガイド編集部
地方財政小辞典

横田 光雄, 斎藤 恒孝, 益本 圭太郎
教職の意義と職務 森 秀夫

あなたは私の手になれますか 小山内 美智子
就職活動言葉づかいの基本 宮川 俊彦

自白の研究—取調べる者と取調べられる者の心的構図
浜田 寿美男

自然科学 (400)

身体知—身体が教えてくれること
内田 樹, 三砂 ちづる

もっと歩こう! 大島 清
身体の仕組みがよくわかるからだマップ

Trevor Weston
健康なからだの基礎—養生の実践 日本養生学会

公衆栄養学実習 上田 伸男

SPSSによる分散分析と多重比較の手順 石村 貞夫
健康食品のすべて—ナチュラルメディスン・データベース

田中 平三
栄養療法ミニマムエッセンシャル

森脇 久隆, 大村 健二, 井上 善文
実践肝疾患の栄養療法 肝と栄養の会

ヌードル・パン・サラダ 日本給食指導協会
給食施設のための献立作成マニュアル 赤羽 正之

ニュートリションコーチング
鱈 信子, 平野 美雪, 柳澤 厚生

肥満の行動療法 足達 淑子
99・9%は仮説—思いこみで判断しないための考え方

竹内 薫
食育入門—豊かな心と食事観の形成 福田 靖子

大量調理—品質管理と調理の実際 殿塚 婦美子
数字で知る人体 日本雑学研究会

摂食障害の理解と対応—現代の思春期女性
井上 洋一

やさしい医療系の統計学 佐藤 敏雄, 村松 幸
よくわかる摂食・嚥下のメカニズム 山田 好秋

食物アレルギーの手びき—正しい知識と治療, 食生活指導
馬場 實, 中川 武正

バラエティライズ(ごはん・丼物) 日本給食指導協会
一品料理献立集—基本献立と治療食・軟菜食・行事食

刑歯薬出版株式会社
老人ホーム・在宅介護のための治療食・介護食ガイド

藤沢 良知

工学・技術 (500)

ソフトランディングの科学—ゆっくり、時間を長く
池内 了

基礎から学ぶ調理実習 新調理研究会
海岸環境工学 岩田 好一郎

新編住宅の計画学—すまいの設計を考える
岡田 光正, 藤本 尚久, 曾根 陽子

基礎から学ぶ調理実習 新調理研究会
生活と技術 中島 利誠

人口減少と環境 環境省
塩分1日6gの和風献立 小川 聖子

1600 kcalの健康献立—献立のたて方教えます
荻原 悦子

体がよるこぶカルシウムのおかず300品
竹内 富貴子

体がよるこぶ鉄のおかず 300 品 竹内 富貴子
三重の味千彩万彩 みえ食文化研究会

文 学 (900)

産 業 (600)

「地産地消」の現状と展望 食料白書編集委員会
照葉樹林文化論 中尾 佐助
『持続する成長力』に向けて 経済産業省
「攻めの農政」の実現に向けた改革の加速化
農林水産省
食料経済 — フードシステムからみた食料問題
高橋 正郎
世界貿易機関(WTO)を斬る: 誰のための「自由貿易」か
鷲見 一夫

かたつむりのうた 竹内 令
想う 山本 周五郎
結ぶ 山本 周五郎
今夜は心だけ抱いて 唯川 恵
町長選挙 奥田 英朗
ハリー・ポッターと謎のプリンス J.K. ローリング
エンキョリレンアイ 小手鞠 るい
赤い指 東野 圭吾
千の風になって 新井 満
Gift 古川 日出男
きみに読む物語 ニコラス・スパークス

芸 術 (700)

書跡・典籍、古文書の修理 池田 寿
現代人のからだと心の健康 平木場、浩二
人面をもつ鳥 — 迦陵頻伽の世界 勝木 言一郎
初期狩野派 — 正信・元信 山本 英男
水泳コーチ教本 — 公認水泳コーチ用 日本水泳連盟
健康運動指導のための健康管理概論 中村 榮太郎
美人風俗画 大久保 純一
遊楽図と歌舞伎図 田沢 裕賀
祭礼図 佐藤 康宏
競技力向上のスポーツ栄養学
トレーニング科学研究会

語 学 (800)

朝日キーワード時事英語 朝日新聞社
On campus 東京大学教養学部英語部会
英字新聞が読める! 聞ける!
The Japan times オフィシャル版
フランス留学で役に立つ単語と表現
朝比奈 美知子
英語がわかればフランス語はできる! 久松 健一
就職試験の成功する作文・小論文 阪東 恭一
論作文の奥義 — 就職試験内定奪取! 坂口 允史
話し方のマナーとコツ 伊藤 美樹
語源 — ルーツを知れば思わずナットク! 山田 俊幸
スピーキングの指導とテスト — 実例ハンドブック
ニック・アンダーヒル



この冊子は古紙配合率100%、
白色度70%の再生紙を使用し
ています。